

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520399

研究課題名（和文）

室町前期の古記録に於ける記録語・記録語法の研究

研究課題名（英文）

A Study of "Kirokugo・Kiroku-goho" in the Archaic Records of the early Muromachi Period.

研究代表者

堀畑 正臣 (HORIHATA MASAOMI)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：30199559

研究成果の概要（和文）：室町前期の古記録（中原師守『師守記』（記録 1339～74）、三条公忠『後愚昧記』（記録 1361～83）、伏見宮貞成親王『看聞日記』（記録 1416～48））に於ける記録語・記録語法の調査と研究を行い、（1）記録語「計會」、「秘計」の意味の変遷をまとめ、（2）『看聞日記』の記録語「生涯」についての先学の記述の訂正と意味を論じ、（3）記録語法の「有御～（御～あり）」について『覚一本平家物語』と古記録資料の関係を究明し、（4）これらを取めた研究成果報告書を作成した。（5）また、多くの記録語・記録語法の用例をカードに取り、今後の研究に利用できるようにした。

研究成果の概要（英文）：I examined the recoding words and the use of these words in the documents in the early Muromachi period, including "Moromoriki (師守記)" (Moromori Nakahara, 1339-1374), "Gogumaiki (後愚昧記)" (Kintada Sanjo, 1361-1383), and "Kanmon Nitsuki (看聞日記)" (Imperial Prince, Sadafusa Fushiminomiya, 1416-1448). In this study, I (1) summarized the changes of the meanings of the recording words, "keikwai (計會)" and "hikei (秘計)," (2) discussed the previous researchers' corrections and meanings of the recording word, "Shaugai (生涯)" in "Kanmon Nitsuki," (3) investigated the relationship between "Kakuichibon Heike Monogatari (覚一本平家物語)" and documents, regarding the use of the recording word, "go/on/gyo/mi --- ari, (御～あり)" (4) created the report of the results of these studies, and (5) recorded many recording words and the use of these words for future research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：語彙

1. 研究開始当初の背景

古記録の国語学的研究は今まで、平安後期が中心で、それに院政期・鎌倉期の研究が少々なされているという状況であった。平成16年～18年科研(課題番号:16520283「鎌倉時代の古記録に於ける記録語・記録語法の研究」)に於いて、鎌倉期の古記録の記録語や記録語法を中心に調査を継続してきた。鎌倉期の古記録文献は平安・院政期のものと比べると文体的には変化を見せている。また、記録語の意味についても平安・院政期の記録語の意味を踏まえつつも文章内での役割を変えたり、派生の意味に変化する現象が出てきている。しかし、未だ大きな変化ではない。かつて、『看聞御記』に見える「記録語」(森正人(代表)・堀畑正臣他、『伏見宮文化圏の研究 学芸の享受と創造の場として』(課題番号:10610430)平成10年～11年度科学研究費補助金、[基盤研究(C)]研究成果報告書)や『看聞日記』に見える「記録語」(一) - 和製漢語の場合 - (『日本文化研究』第二集(大連外国語学院)103～116頁(2001年))に於いて、室町前期の『看聞日記』の一部を調査し、そこに見える記録語や記録語法について述べた。室町前期の古記録は院政・鎌倉期に比して記録語の意味の上からも記録語法の上からも大きな変化が見られた。そこに見られる記録語や記録語法は抄物の言葉やキリシタン資料の言葉、狂言の言葉と関連が深いことも感得され、室町前期の古記録の国語学的研究の必要性和重要性を感じた次第である。

2. 研究の目的

今回、室町前期の古記録文献として、(1)家の違い、(2)自筆本を持つこと、(3)活字本や影印本が入手しやすいこと、(4)記録期間の分布などを勘案して、『師守記』(記録1339～74)、『後愚昧記』(記録1361～83)、『看聞日記』(記録1416～48)に於ける記録語や記録語法を調査し、個々の文献の文体的特徴、これらに共通する記録語や記録語法の特徴、新たに出現する記録語の記述、室町前期の記録語の意味を記述し、鎌倉期のものとの文体的変遷や記録語の意味変化などを記述する。特に、『看聞日記』を軸として、その前段階がどのような状況であるかを『師守記』『後愚昧記』とを通して考察する。こ

れらの調査を踏まえ、室町前期の古記録の状況を押さえ、それを基にこれまでに調査してきた平安・院政期、鎌倉期の文献との比較を通して、平安・院政期から、鎌倉期、室町前期に於ける古記録の文体的変遷と記録語の意味変化を明らかにする。なお、取り上げる三文献の概要は次の通りである。1『師守記』(記録1339～1374)中原師守、自筆本・刊本あり、鎌倉(鎌倉院政)全11巻。2『後愚昧記』(記録1361～1383)三条公忠、自筆本・刊本あり、大正(岩倉)全4巻。3『看聞日記』(記録1416～1448)伏見宮貞成親王、自筆本・刊本あり、鎌倉(鎌倉院政)全2巻。

3. 研究の方法

(1)「記録語(和化漢語と和製漢語)」、(2)「異名」、(3)「唐名」、(4)「漢語表現」、(5)「漢文語法」、(6)「記録語法」、(7)「唐代口語」、(8)「病の語」、(9)「その他」という観点で記述研究を行う。各々の内容を以下略述する。尚、用例は便宜上『看聞日記』や鎌倉期の『明月記』に見える語で示す。

「記録語(和化漢語と和製漢語)」: 記録語の中には元は中国の漢語であったものが日本に伝わり長年使用される中で日本的に意味を変えたものがある。それを「和化漢語」として取り上げる。また、日本でできた和製漢語も室町期には多くなるのでそれらも取り上げる。「和化漢語」としては、鎌倉期に意味変化が見られるもの(1「對揚イヅ」2「牢籠ウウ」3「和譏ガ」等)や鎌倉期から室町期にかけて意味変化を起すもの(4「涯分ガ」5「活計カ」6「計會ケ」7「時宜(時儀)ジギ」8「生涯(生害)シウガイ」9「籌策チウカ」10「比興ヒキウ」11「秘計ヒケ」12「水駅スイキ」等)を取り上げる。このほか「和製漢語」として(13「勘落カク」14「不合期ゴウ」15「入根ジユ」等)も取り上げる。このほかに新たな記録特有語や新たな記録語についても調査する。

「異名」: 『看聞日記』には1「回禄カウ; 火災」2「驚眼ガガ」; 銭」3「五色ゴシキ; 瓜」4「五明ゴメイ; 扇」5「首陽シウ」; 餓死すること」等の異名が見える。室町前期の「異名」の使用を調査する。

「唐名」: 鎌倉期の『明月記』には「羽林」「京兆」「戸部」「執柄」「宸儀」「大理」「都護」等の「唐名」の使用があるが、

室町前期の古記録文献を調査する。

「漢語表現」：平安・院政・鎌倉期のそれぞれの古記録文献を見ていくと、本来「漢籍」で使用された「漢語表現」というべきものが見られる。これらは日記の記録者の漢文の学識によって様々な様相を見せるのであるが、院政期の古記録あたりから増加する傾向が見られる。『明月記』でも「原憲」「漁父之誨」「謳五噫」「会稽」「進退惟谷」等が見られた。これらの語は古記録の中では、漢語イディオムとして受け継がれていく。このような「漢語表現」に着目して調査する。

「漢文語法」：「豈」「蓋」「況」やその他の所謂「漢文訓読特有語」が平安後期の古記録や院政期の古記録には使用されている。室町前期の古記録に於いて、所謂「漢文訓読特有語」の使用状況を調査し、本来の漢文の語法とは違う語法で室町前期の古記録で使用されていないかに注目して調査する。

「記録語法」：1「須(すべし)、而(逆接)」、2「以(もつて)被(は)」、3「被成(なる)」などは古記録特有の語法であることが判明した。このほか「被下(くだ)」なども古記録・古文書から浸透してきた語法と思われるが、それらの語法の使用状況の調査や新たな記録語法の発見を心がける。

「唐代口語」：「唐代口語」の使用状況の調査。「向後(むこう)」「下官(げくわん)」「自餘(みづか)」「本自(ほんみづか)」「等閑(とうかん)」等が、室町前期の『看聞日記』にどう表れるかを見る。

「病の語」：室町前期の『看聞日記』の「病の語」を取り上げる。『看聞日記』には「瘧病」「脚氣」「虚勞」「減氣」「傷風」「中風」などが見える。『明月記』には「飲水(いんすい)」「獲麟(かくりん)」「寸白(すんぱく)」「石麻(せきま)」「雜熱(ざつねつ)」等の語が見られた。

その他：『看聞日記』に見られる特徴的なことを記述する。影印本や写真帳などで用例の確認を行う。

4. 研究成果

平成 19 年度は、後崇光院伏見宮貞成親王の『看聞日記(かんもんにつき)』(1416～1448)の調査を行い、併せて東京大学史料編纂所や国立歴史民族博物館にて文献調査、資料収集を行った。『看聞日記』ではその一部の調査を取り入れて「中世古記録・古文書資料に於ける漢語の意味変化 「計會」「秘計」をめぐって」を熊本大学拠点形成研究プロ

ジェクト編『東アジアの文化構造と日本的展開』(北九州中国書店)に発表した。鎌倉期の『明月記』、『民経記』、室町期の『看聞日記』、古文書の「東寺百合文書」の中から 14 世紀～15 世紀半ばの用例を集め、「計會」と「秘計」の意味の変遷と展開を考察した。

「計會」は、鎌倉時代から室町時代にかけて、「はからいあわせて・一時に」、「一時に落ち合う・集まる」、「一時に(出来事が)重なる」、「物事が重なって取り込んでいること」、「不意の出来事であわてること」、「困惑すること」、「身体的に困却すること」、「やりくりがつかなくて困却すること」、「出費がかさむこと」、「出費がかさんで経済的に困窮(貧窮)すること」の意味が見えるが、室町期の『看聞日記』では、～の意味が見えている。古文書の室町期の用例(「東寺百合文書」)では、～の意味が見え、古記録と古文書では使用される場面が違うようで意味的に偏りが見られる。また、室町期は「困却すること」や「出費がかさみ経済的に困窮(貧窮)する」の意味が多くなる。

「秘計」は、鎌倉時代の藤原定家の日記『明月記』では、「秘密のはかりごとをおこなう(1例)」、「人に知られず任官や訴訟のために働きかけること(11例)」、「うまく取り計らうこと、うまく取り計らって、処理すること(4例)」の意味で分布している。

『明月記』と重なりつつも少し時代が下たる藤原経光の日記『民経記』では「秘密のはかりごとをおこなう(0例)」、「人に知られず任官や訴訟のために働きかけること(紙背文書に1例)」、「うまく取り計らうこと、うまく取り計らって、処理すること(日記部に4例、紙背文書に2例)」、「工面する、やりくりをする(文書類に2例、紙背文書に8例)」、「間に立って事を取り持つこと、なかだち、媒介(紙背文書に2例)」という風に、～、～と意味が見られる。また、日記本文と文書や紙背文書とで意味の分布が違うように思える実態が窺える。今まで日記本文と引用の文書類や紙背文書とを分けては考察してこなかったが、今後から分けて考察して行く必要があることを実感した。記録語の意味は文書類で多様な意味を展開させているようである。この点は今回の研究でわかった一つの成果でもある。

『看聞日記』では、「秘密のはかりごとをおこなう(1例)」、「間に立って事を取り

持つこと、なかだち、媒介(4例)」。1例が「うまく取り計らうこと、うまく取り計らって、処理すること」と「間に立って事を取り持つこと、なかだち、媒介」の中間の意味と取れる例であった。

室町期の『東寺百合文書』では、「秘計」の意味は、の「秘密のはかりごとをおこなう」の「秘密」が取れて「はかりごと」に『変化する。の意味は使用されず、は使用されている。の「工面する、やりくりをする」の内容が、「a、年貢や公事等の工面、やりくりをする」や「b、金銭面の工面、やりくりをする(支払い側が金策をし、支払うこと)」や「c、受領者が支払い側の支払い可能な額に減免すること」、「d、やりくりしてもらったのを借りること、借金すること、無心すること」へと多様に变化している。の意味も「a、受領者側に立って、支払い側の未納分の年貢代を納入するように交渉すること」と「b、支払い側に立って、未納分の年貢代を減額するように受領者側に交渉すること」の二つの意味に分岐する。これらの意味変遷(意味派生)は大変興味深いことである。なお、詳細は報告書を参照のこと。

『看聞日記』の概要を記す。

(1)「記録語」としては、「青侍(あおざむらい) 粗(あらあら) 會尺・會釋(えしゃく) 謳歌(おうか) 尾籠(おこ・をこ) 雅意(がい) 邂逅(かいこう) 涯分(がいぶん) 各出(かくしゅつ) 活計(かつけい) 勘落(かんらく) 機嫌(きげん) 響応(きやうおう) 軽忽(きやうこつ) 敬屈(けいくつ) 計會(けいくわい) 經廻(けいぐわい)、現形(げんぎょう) 見所・見證(けんじょ) 見来(げんらい) 故障(こしょう) 巨難(こなん) 不合期(ふごうご) 左道(さとう・さどう) 遮而(さえぎりて) 自愛(じあい) 併(しかしな) 式(しき) 時宜(じぎ) 色代(しきたい) 入根(じゅこん) 枝葉(しやう) 生涯(しやうがい) 参差(しんし) 斟酌(しんしゃく) 造畢(ぞうひつ) 楚忽(そこつ) 存内(ぞんのうち) 題目(だいもく) 逐電(ちくでん) 倩~(つらつら) 中央(ちゅうおう) 籌策(ちゅうさく) 張行(ちやうぎょう) 電覽(でんらん) 同編(どうへん) 突鼻(とつび) 鼻負(ひいき) 比興(ひきょう) 秘計(ひけい) 飛行(ひかう・ひぎやう) 不合期(ふごうご) 以外(もつてのほか) 無勿体(もつたいなし) 夜前(やぜん) 与奪(よだつ)

牢籠(らうろう) 和讒(わざん)」などが見える。今後、まとめて論考をなしていきたい。(2)「異名」としては、「五色(瓜)」「五明(扇) 回祿(火事)」「驚眼(銭)」「歡樂(病氣)」「首陽(餓死)」「要脚・用脚(銭)」「龍蹄(駿馬)」などが見える。(3)「唐名」としては、「亞相」「黃門」「左槐」「大理」「八座」などが見えるが、あまり使用していない。(4)「漢語表現」としては、「雪会稽耻」「履薄氷」「守株」などが見えるのが、これらは「漢語表現」というよりは、一種の慣用句やイディオムととらえた方が良いと思われるので、(9)の「その他」で再述する。(5)「漢文語法」はとくに目に付かない。(6)「記録語法」として、「有御~」は多い。特徴として「可有御~」のように当為表現が多くなっている。まとめは今後行う。「被下(くださる)」に「付廻可被下之由」「可被下安堵之由」「御訪可被下之由」「可被下検見之由」など当為表現の「可(べし)」を伴った用例が増えている。また、「南御方へ被執申可被下之由申」のような「執り申されくださるべきよし申す」と補助動詞に解読できるような用例も見える。今後、整理して論考をまとめたい。「被成(なさる)」は未だ名詞性のものをとる。「須(すべからく~べし)」は用例も少なく、逆接と繋がらなくなった。

「以~被~(もつて~らる)」はよく使用されている。(7)「唐代口語」として、「向後」「自餘」があるが、あまり目立たない。

(8)「病関連の語」として、「違例」「瘧病」「疫病」「脚氣」「歡樂」「狂氣」「虚勞」「付狐」「減氣(げんき)」「雜熱(ざうねち)」「傷風」「所勞」「水癰(すいよう)」「増氣」「中風」「内損」「腹痛」「腹病」「不例」「病氣」「病惱」「病癰(びょうよう・ようをやむ?)」「風氣」「不合期(ふごうご)」「疱瘡」「本復」「痢病(りびょう)」などがある。(9)「その他」として、一種の慣用句やイディオムが見える。例えば「失生涯」「失東西暗然」「消肝」「銘肝」「不及是非」「雪会稽耻」「履薄氷」「彼申状黑白論也」「室町殿聊御手を被懸」「被懸御手」「歎而有餘」「不足言」「求吹毛疵」「理不盡」「失面目」「開愁眉」「閉眉」「構見参」「入見参」「不思寄」「カキ消之様逐電」「守株」などが見える。また、漢語副詞「一円、一往、一向、一切、結句、無左右、始終、大概、大略」が見える。

平成20年度は、暦応二年(1339)から応

安七年(1374)の記録をもつ中原師守の日記『師守記(もろもりき)』の記録語と記録語法の調査を行った。(1)『師守記』の記録語としては、「青侍、粗(あらあら)及晩頭(及晩) 邂逅、各出、有(手戻)其數、計會、兼日、故障、緯(こと)~、指合、雜怠、~式、時儀・時議、參差、侘僕、大略、比興、秘計、不便、以外、与奪、牢籠」などが見えた。一見して、室町前期の『師守記』は『看聞日記』のように多様な記録語の出現はないことがわかった。(2)異名については、「回祿(火事)」があったが、その他、特に目立ったものはない。(3)唐名としては「武衛」「黃門」「大理」などがあるが少ない。(4)特に注目されるような漢語表現はない。(5)特に注目されるような漢文語法はない。(6)記録語法としては、「有御~(御~あり)」の「御~」部は、「御教書」「御文」「御風呂」「御飯」「御故障」「御返事」のような名詞から、「被仰下事」「御尋事」のような「事」で括った名詞句、「御覽」「御存知」「御對面」「御聽聞」「御同車」「御披露」「御奉行」のような動詞性を含んだ動名詞、そして「御參」「御出」のように訓読みの可能性もあるが多分に音読みの漢語で動詞性を持つ語と取る方が無難なもの、最後に「御返」「御渡」「御尋」のように「御(お)+和語」形式のものにまで、広がってきている状況が読み取れる。なお、比較検討のために、14世紀の『覚一本平家物語』に出現する記録語「有御~(御~あり)」調査した。その用例を集めて分類し、所謂和漢混淆文の場合と11世紀の和文の代表である『源氏物語』の「御~あり」、12世紀の漢文訓読文の系統の『今昔物語集』の「御~有り」、11世紀の古記録文献の『御堂関白記』の「有御~(御~有り)」と比較した。所謂和漢混淆文の「御~あり」の状況は、和文体の『源氏物語』の流れからは説明できず、漢文訓読文系統の『今昔物語集』の流れからも説明は困難で、『源氏物語』と同時期の古記録資料『御堂関白記』において、14世紀の所謂和漢混淆文の『覚一本平家物語』へとつながる流れを見いだすことができることがわかった。軍記物語の和漢混淆文と古記録の文章の結びつきの強さが確認された。今後、中世の和漢混淆文と古記録の比較研究ができると期待している。「被下(くださる)」についても用例を集めたが、「被下(くださる)」の目的語は「宣旨、折紙、御牒、令旨、下名、御曆、御補歴、用途一結」

などの名詞が見える。このほか、「以~被~(もって~らる)」の語法もある。(7)唐代口語出自の語としては「向後」があるが唐代口語出自の語は少ない。(8)病の語としては、「所勞」程度で特に目立つ語はない。尚、忌詞に「後醍醐院御事」が見える。

このほか、昨年同様、『看聞日記』の調査研究も継続して行った。

平成21年度は、『後愚昧記(ごぐまいき)』(記録1361~1383年、筆者三條公忠、自筆本、刊本は大日本古記録全四巻)の記録語と記録語法の調査を行った。(1)『後愚昧記』の記録語としては、「青侍、粗(あらあら)、會釋、白地(あからさま)、邂逅、雅意、經廻(けいぐわい)、計會、遮而(さえぎりて)、左道、併(しかしながら)、~式、時宜・時議、枝葉、生涯、參差、吹擧・推擧、題目、對揚、大略、逐電、一二(つまびらか)、電覽、秘計、比興、不合期、以外、有若亡、与奪、牢籠、疋弱、和讒、和与」などが見えた。(2)異名としては、「回祿(火事)」「槐林(大学)」「青鳥(使者)」が見えた。(3)唐名としては、「亞相、羽林、黃門、執柄、攝籙、大樹、大理、都護、左幕、右幕、武衛、攝州、若州、丹州」などが見えた。(4)漢語表現としては「不可勝計(しょうけいすべからず)」が見える。(5)漢文語法としては、「豈可~哉」「況於~」が見える。(6)記録語法としては、「有御~(御~あり)」の「御~」の部分に「御對面、御沙汰、御祈念、御方違、御遊、御幸、御入棺、御座」の例がある。さらに「可有御~」の形で當為表現の「可」を伴っての使用に「御參、御覽、御結縁、御出京、御勲仕、御平癒、御許容、御向顔、御計、御察」などがあり、動詞性の比率が高まってきている。「被下(くださる)」の目的語は「御引直衣」「御服」等の名詞と「御書」「勅例并牒状」「宣旨」「院宣」「勅裁」「勅書」「綸旨」「安堵」等の書状及び命令書系統の名詞類がある中に、書状の中に「察下され候へく候」(2例)や「可被察下候」が見えた。「察し・下さる」という「漢語サ変+補助動詞」と見れば、「下さる」の補助動詞の早い例であり、古記録の日記本文より書状の方に「下さる」の補助動詞用法が先に出現する点で興味深い。室町前期の14世紀後半の『後愚昧記』は15世紀前半の『看聞日記』のように多様な記録語の出現はないが、着実に変化してきている。「須

(すべからく～べし)」は逆接に繋がる語法(「雖須～」「須～、然而～」「須～之處、」など)が多い。「以～被～(もって～らる)」の語法もある。(7)唐代口語としては、「向後(コウゴ)、大都(材ム)」が見えたが、唐代口語は少なかった。(8)病の語としては、「疫癘、疫疾、瘧病、狂気、虚気、虚勞、痔所勞、傷寒、赤痢、中風所勞、内損所勞、病惱、風気、風勞、不豫、三日病」などがある。(9)その他として、漢語副詞に「一円、一向、一切、始終、隨分、大概、大略、多分」などが見える。

このほか、『看聞日記』調査も継続して行い、『看聞日記』の記録語「生涯」について論考(題目「『看聞日記』に於ける「生涯」をめぐって」)を報告書にまとめた。その一部、まとめの箇所を以下に引用し掲載する。

『看聞日記』の「生涯」とそれを含む熟語「及生涯」、「失生涯」、「懸生涯」、「生涯谷」の用例を検討したが、「生涯」には「所領没収、役職停止などで生活のすべをなくす。」、「窮地に陥いる。」、「命を失なう。／命を懸ける。」の三つの意味がある(の意味についてはそうも読めるという程度)ことが判明した。なかでも『看聞日記』の「生涯」の例の多くは、 の「所領没収、役職停止などで生活のすべをなくす。」の意味で使用されている。 の「窮地に陥いる」の意味は確実にあるが、 の「命を失なう。／命を懸ける。」の意味は例も少なく、文脈から類推できるという程度であり、『看聞日記』では「殺害」や「自決」の意味までは至っていない。佐藤喜代治著『日本の漢語』や小学館『日本国語大辞典』(第二版)の記述は見直すべきである。詳細は報告書を参照。

三年間を通じて調査してみて、『師守記』は語彙や文章や記録語・記録語法という面からはさほど個性の見られる文献ではないことが窺えた。しかし、時代の変遷については語る材料があるので、今後他の文献との比較を通して論考に取り入れていきたい。

『後愚昧記』の方は、多様な用例が見え、記録資料として興味深いものであることがわかった。更に精査を加え、他の文献との比較も行い、今後の論考に取り入れていきたい。

『看聞日記』の調査は、分量が多く、まとめとしては、今回一部しか提示しえなかったが、興味深い資料であることは疑いない。更なる精査ととりまとめを行い、今後の記録

語・記録語法の論考に結実させていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

堀畑正臣「2008・2009年「文章・文体(史的研究)」展望」(『日本語の研究』第6巻3号、2010年7月、7頁分)〔印刷中〕査読有り。

堀畑正臣「『覚一本平家物語』に於ける「(ご/おん/ぎょ/み)～あり」をめぐって」(月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二編『古典語研究の焦点』、武蔵野書店、2010年1月、675～697頁) 査読有り。

堀畑正臣「書評：遠藤好英著『平安時代の記録語の文体史的研究』」(『日本語の研究』第4巻2号、2008年4月、98～104頁) 査読有り。

堀畑正臣「中世古記録・古文書資料に於ける漢語の意味変化 「計會」「秘計」をめぐって」(『東アジアの文化構造と日本の展開』、熊本大学拠点形成研究プロジェクト、北九州中国書店、2008年3月、247～292頁) 査読無し。

〔学会発表〕(計2件)

堀畑正臣「『看聞日記』に於ける「生涯」をめぐって」(2010年3月29日、第230回筑紫日本語研究会、於熊本大学)

堀畑正臣「『覚一本平家物語』に於ける「御(ご/おん/ぎょ/み)～あり」をめぐって」(2009年8月6・7日第227回筑紫日本語研究会、於九重共同研究所)

〔図書〕(計1件)

堀畑正臣『室町前期の古記録に於ける記録語・記録語法の研究』〔平成19(2007)年度～平成21(2009)年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究報告書、平成22(2010)年3月、かもめ印刷〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

堀畑 正臣 (HORIHATA MASAOMI)
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：30199559